

姚合の詩における閑適の要素

―白居易との関連をめぐって―

中 木 愛

はじめに

中唐の詩人姚合は、賈島とともに「姚賈」と称せられ、苦吟派詩人の一人と捉えられている。⁽¹⁾しかし、姚合の詩を概観すると、閑適の詩風を持つものも目立ち、中には白居易の作ではないかと疑われるようなものさえある。苦吟派とされる姚合が、相対する閑適や閑吟の要素を持つのであれば、姚合という詩人について、また、苦吟および閑吟の語の定義について、改めて考え直す必要があるのではないか。これは、中唐詩壇の全貌を見渡す上で、非常に重要な問題であると思われる。

岡田充博氏の論考「詩魔」について⁽²⁾、「詩魔」補考⁽³⁾は、詩作への耽溺を詠じる中唐の風潮を説明しようとする視点から、姚合と白居易の関係について、非常に興味深い事実を指摘されている。岡田氏は、中唐の詩人が詩作態度を表現する際、韓愈とその門下の孟郊・賈島・李賀は「苦吟」、白居易・元稹・劉禹錫は「詩魔」の語を用いる

という使い分けが見られること、唯一、姚合には両方の用例が見られることを指摘し、姚合が白居易グループに近い位置にいた可能性を論じておられるのである。

本稿では、中唐詩壇における姚合の位置を明らかにするために、まず姚合における閑適の要素について考察し、閑適という側面から見た白居易との関係を明らかにしたい。

なお、姚合の詩の本文は、劉衍校『姚合詩集校考』（古文獻研究叢書、岳麓書社、一九九七）に拠り、『姚合詩集校考』が底本としている『姚少監詩集』（明・毛晋の汲古閣刻唐人六集本）の巻数を記した。また、白居易の詩は、謝思煒撰『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六）を底本とし、詩題の前に、花房英樹著『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店、一九六〇）の「綜合作品表」による作品番号を付した。姚合と白居易以外の唐詩は、『全唐詩』（中華書局点校本）に拠り、詩題の後に『全唐詩』の巻数のみを記した。唐以前の詩は、『文選』所収であれば『文選』

に拠り、それ以外の詩は『先秦漢魏晉南北朝詩』（遼欽立輯校、中華書局、一九八三）に拠った。

一 歴代の評価と先行研究

まず、姚合に対する歴代の評価を確認しておきたい。

姚賈の併称は南宋には定着していたようだ。南宋・嚴羽撰『滄浪詩話』詩弁に、

近世趙紫芝・翁靈舒輩、独喜賈島姚合之詩、稍稍復就清苦之風。江湖詩人多効其体、一時自謂之唐宗。（近世の趙紫芝・翁靈舒の輩、独り賈島・姚合の詩を喜み、稍稍復た清苦の風に就く。江湖の詩人多く其の体に効ひ、一時自ら之を唐宗と謂ふ。）

とあって、南宋末期の永嘉四靈や江湖派詩人が、姚賈の詩風を「清苦」と捉え、倣っていたことが窺える。

また、元・方回撰『瀛奎律髓』には、姚合を賈島の亜流とする評価が見られ、詩体が五言律詩に限られる点、詩の題材が一定の狭い範囲内に限られる点、表現が細やかな点などが指摘されている。明・高棅撰『唐詩品彙』も、「清苦」の語によって姚賈の詩風を総括している。

清代では、『四庫全書總目提要』の「姚少監詩集」「極玄集」に、姚合の詩に対する単独の評語として「刻意苦吟」の語が見える。

刻意苦吟、冥搜物象、務求古人体貌所未到。（意を刻して苦吟し、物象を冥搜し、務めて古人の体貌の未だ到らざる所を求む。）

『四庫全書總目提要』「姚少監詩集」

合為詩刻意苦吟、工於点綴小景、搜求新意。而刻画太甚、流於纖仄者、亦復不少。（合詩を為るに意を刻して苦吟し、小景を点綴するに工にして、新意を搜し求む。而れども刻画太甚しく、纖仄に流るる者も、亦復た少なからず。）

『四庫全書總目提要』「極玄集」

このように、苦吟の側面に言及する見方が主流をなす中、閑適の側面を指摘したものもある。元・辛文房撰『唐才子伝』（巻六、姚合伝）には、

与賈島同時、号姚賈、自成一法。島難吟、有清冽之風。合易作、皆平澹之氣。興趣俱到、格調少殊。所謂方拙之奥、至巧存焉。（賈島と時を同じくし、姚賈と号せられ、自ら一法を成す。島は難吟にして、清冽の風有り。合は易作にして、皆平澹の氣あり。興趣は俱に到るも、格調は少しく殊なり。所謂方拙の奥に、至巧存するなり。）

とあって、賈島の詩が「難吟」「清冽之風」という苦吟の

要素を持つのに対し、姚合が「易作」「平澹之氣」の要素を持つことが指摘されている。「易」や「平」「澹」は、白居易の詩の形容に用いられる語であり、閑吟に繋がる要素と言えるだろう。

『瀛奎律髓』の「遊春」詩の評(『瀛奎律髓』卷一〇)にも、

又所用料、不過花竹鶴僧琴菓茶酒。於此幾物、一步不可離、而氣象小矣。(又た用ふる所の料は、花・竹・鶴・僧・琴・菓・茶・酒に過ぎず。此の幾物に於いて、一步も離るべからずして、氣象小なり。)

とあって、姚合の詩材の狭さが指摘されているが、ここに挙げられた「花・竹・鶴・僧・琴・菓・茶・酒」は、まさに白居易が閑適の世界を形成する要素として好んで用いた材料である。姚合の詩にも閑適の要素が見出されていることが窺える。

このように歴代の詩話において、姚合は、「清苦」な詩風、局部に拘った細緻な描写、新たな境地の探求、五言律詩への偏り、詩材の狭さといった特徴が、賈島との閑連において指摘されながら、「苦吟詩人」のイメージが形成され定着していく軌跡を見ることができ。一方、「閑適」や「白居易」といった言葉が、姚合を説明する文面に直接浮上することはないにせよ、平淡な雰囲気やプライベートな趣味の世界を題材とする点など、白居易の閑

適の詩風に繋がる要素も確かに捉えられていたことが分かった。

張震英「20世紀姚合研究述論」⁽¹⁰⁾によれば、中国においては、八十年代まで姚合の詩風について専門的に論じたものはなく、姚合と賈島を分けた論は九十年代以降ようやく現れたようである。それに伴い、奇をてらう賈島とは異なる姚合の特徴として、私的な日常生活を細かく描写する閑適の詩風にも、焦点が当てられるようになった。日本における姚合研究の専論では、玉城要氏の論考(後述)が見られるのみである。

姚合における閑適の要素については、主に、蔣寅『武功体』与『吏隱』主題的発展⁽¹¹⁾と玉城要「姚合の詩について―中唐期における新しい個性として―」に指摘が見られ、吏隱の詠出という観点から、白居易との関係にも論及されている。

前者は、姚合「武功県中作」が吏隱生活の具象化であることを最初に指摘したもので、姚合が、初任のこの時期から大胆にもものぐさな官吏の姿を詠出していること、こういったもののぐさな態度は、謝朓・王維・戴叔倫・韋応物・白居易に連なることを論じている。

後者は、姚合が、官職に就いた当初から私的空間の充足を第一義とし、本来建前として詠わなければならないはずの政治的抱負や社会状況を反映する詩を詠おうとはしなかったことを指摘し、姚合の詩が、韋応物や白居易の線上に位置する可能性についても論じている。

このほか、劉寧「求奇」和「求味」——論賈姚五律的異同及其在唐宋五代的流變¹⁹⁾は、姚合はもともと閑適の興趣を追求していたものの、長らく地方に零落していたため共有者がいなかったこと、のちに白居易等との交流を通して、安閑自得の精神が強化され、閑適の生活スタイルが実践されたことを論じている。

ただし、調査の及ぶ限りでは、姚合と白居易の関係は、主に閑適の詩風や語彙の平淡さにおいて総括的に指摘されるに止まり、二人が具体的にどういった表現や詩境を共有しているのか、根拠を示して論証したものは見られないようだ。

そもそも、閑適という新たな詩のジャンルを確立したのは白居易であり、姚合の詩に閑適の要素を認める時点で、白居易との関連を指摘したことになる。しかし、「苦吟」「閑吟」という一見相反する言葉で捉えられる、同時代の両詩人の関係を、単に題材や詩風の類似点のみで説明することには、限界があるだろう。本稿では、語彙レベルの検証を加えながら、両者の共通点を具体的に呈示し、相關関係についても触れてみたい。

二 白居易と共通の詩語

筆者は以前、白居易の閑適詩について、言葉のもつ従来のイメージを転換して、生理的なレベルにまで迫った充足感を詠じるといふ特徴が見られることを述べた¹⁵⁾。それは、自らの体で感じ取った幸福感を詩中に定着させる

ための、白居易独自の創意工夫であり、睡眠描写や飲酒描写においてとりわけ顕著に認められたのだが、このうちいくつかの表現が姚合の詩にも見受けられる。

(1) 「枕低」

白居易は、憂いのない安らかなさまを象徴する典故表現「高枕」を、涼感を伴った夏の睡眠の意に限定して用いた。そして、これとは逆に「枕低」という独自の表現を創り出し、「高枕」とは別の、春や秋の温かく柔らかない寝床を詠出した。

・ 枕低茵席軟、臥穩身入牀（枕低く茵席軟らかなり、臥すこと穏やかにして身は牀に入る）

[2967 新秋曉興]

・ 枕低被暖身安穩、日照房門帳未開（枕は低く被は暖かくして身は安穩なり、日は房門を照らすも帳まだ開かず）

[3630 春眠]

「枕低」は、睡眠の心地よさを効果的に描こうとする白居易独自の表現であるが、唯一、姚合「武功果中作三十首」其十八にも、同様の例が見受けられる。

蔣寅氏が、吏隠生活を具象化したものと指摘されるように、この詩には、門を閉じて静かに琴を弾き菓を栽培し、詩を詠じて杖を片手に散歩する隠的世界が、鮮やかに描かれている。

「武功県中作三十首」其十八『姚少監詩集』卷五)

閉門風雨裏 門を閉づ 風雨の裏

落葉与階斉 落葉 階と斉し

野客嫌杯小 野客は杯の小さきを嫌ひ

山翁喜枕低 山翁は枕の低きを喜ぶ

聴琴知道性 琴を聴きて道性を知り

尋菓得詩題 菓を尋ねて詩題を得

誰更能騎馬 誰か更に能く馬に騎らんや

閑行祗杖藜 閑行して 祗だ藜を杖く

三四句に登場する野客や山翁は、門を閉じても遮断されることのない来客であり、姚合の隠的世界を充実させる要素である。¹⁸⁾ その野客が小さな杯を嫌うのは、一度注げば大量に酒が飲めるようにという、食欲でものごさな姿の象徴であり、これと対に、山翁が低い枕を喜ぶさまが描かれている。低い枕とは、当時の士大夫が用いた陶磁器製の枕ではなく、綿などを詰めて作った括り枕のようなものと考えられる。髪の流れを気にする必要のない、自由で安らかな睡眠の姿が連想される。

「枕低」は平易な語の組み合わせであるが、安らかさを表す「高枕」の語が典故表現として定着していた当時、それとは逆の「枕低」を「喜」ぶと表現したところに、発想の転換を見ることがある。姚合も白居易と同様に、言葉の伝統に拘らず身体感覚を優先させて、伸びやかな

睡眠を描いたのである。

姚合が武功県にいた時期は、長慶年間とするのが通説であり、この詩は、白居易が「枕低」と詠じた詩（12967新秋曉興）[3650 春眠]に十年以上先んじる。¹⁹⁾ そして興味深いことに、白居易の二首は、二人が実際に対面し、詩の贈答を始めた大和年間以降に繫年されるのである。ここで姚合と白居易の交友関係を整理しておきたい。二人の直接の交流は、白居易が五十代後半、姚合が四十代後半の遅い時期に始まったようで、大和以降に贈答詩が三首、和詩が二首見られる。数こそ少ないが、これらの贈答詩からは、官僚世界ではなく閑適の生活を愛する点において、二人が心を通わせたようすを垣間見ることができる。

例えば、大和初期に洛陽に転任した白居易は、監察御史分司として洛陽にいた姚合に「[2662 姚侍御見過戲贈]を送り、「晚起春寒慵裹頭、客来池上偶同遊、東台御史多提舉、莫按金章繫布裘」(晩く起き 春寒くして 頭を裹むに慵く、客来たりて 池上に偶たま同に遊ぶ、東台の御史 多く提舉するも、金章を按じて布裘に繫ぐこと莫れ)と詠んでいる。平民の服に官吏の金印を付けないでほしいと言って、自分を役人生活に引き戻すなど戯れているのである。二人の間で、隠遁や閑適な生活への志向が、話題になったのであろう。

このうち、白居易は長安に戻って刑部侍郎となるが、病気による長期療養休暇を経て、太子賓客分司として再

び洛陽に赴いた。姚合は、「寄東都分司白賓客」（『姚少監詩集』卷三）を送り、「闕下高眠過十旬、南宮印綬乞離身」（闕下の高眠 十旬を過ぎ、南宮の印綬 身より離さんことを乞ふ）、「賓客分司真是隱、山泉繞宅豈辭貧、竹齋晚起多無事、唯到龍門寺裏頻」（賓客分司 真に是れ隱なり、山泉宅を繞りて 豈に貧なるを辭せんや、竹齋に晚く起きて多く事無し、唯だ 龍門の寺裏に到ること頻りなるのみ）と詠い、白居易の療養を「閑眠」と詠じ、賓客分司の職を「真是隱」の語で表している。のんびりできるようなった白居易の異動を喜んでゐるのだが、洛陽分司は、白居易自身が後に「優哉分司叟、心力無苦辛」（優なる哉 分司の叟、心力 苦辛無し）（『2209 書紳』）、「唯有分司官恰好、閑遊雖老未能休」（唯だ分司のみ官恰好なる有り、閑遊は老いたりと雖も未だ休む能はず）（『2779 勉閑遊』）と、その自由さを謳歌した閑職であつた。

この詩において、姚合はまた「詩中得意忘千首、海内嫌官只一人」（詩中 意を得るは忘に千首なるべし、海内 官を嫌ふは只だ一人）と、白居易には意に合う作品が千首の多きに上ること、この世で官職に就くのを嫌がつてゐるのは白居易一人であることを詠じてゐる。年齢も地位も自分より上の先輩に対して、単刀直入に「嫌官」といった表現は聊か強烈ではあるが、閑適を愛する白居易の心境を、姚合がよく汲み取っており、白居易もそれを理解していたことが窺えよう。

更にのちの大和九年、裴弘泰の後任として杭州刺史に赴任する姚合に対し、白居易は前杭州刺史としてアドバイスの詩（『3197/3198 送姚杭州赴任因思旧遊二首』）を送っている。其一では、刺史の仕事に励んで人民をいたわるとともに、美しい景色を存分に愛でて楽しむようにと述べた後、末二句で「且喜詩人重管領、遙飛一盞賀江山」（且く詩人の重ねて管領するを喜び、遙かに一盞を飛ばして江山を賀す）と詠い、杭州の自然に向かつて祝いの杯を挙げている。

西湖の美しい風景が広がる杭州は、白居易にとつて特別な思い入れのある土地であり、かつて後ろ髪を引かれる思いで杭州を去るとき、離れがたい思いを舟に託して西湖の風月に伝えた。白居易は、杭州の自然との交流に、風情を愛する姚合という仲間が加わることを喜んだのである。

このように、二人の距離が接近した大和以降、白居易が姚合の詩を見ていた可能性は十分に考えられる。「枕低」の表現が、両詩人にのみ認められることは、偶然ではないだろう。白居易が姚合の「武功県中作」を目にして、自らの詩作に取り入れた可能性が指摘できるのである。

（2）「搔首」

次に、頭を掻く動作を表した「搔首（搔頭）」の語を取り上げる。「搔首」は、『毛詩』邶風・静女に、「静女其姝、俟我於城隅、愛而不見、搔首踟蹰」（静女其妹たり、我

を城隅に俟つ、愛として見えず、首を掻きて蹴蹴す」とあり、相手を待ちわびて憂いに沈む様子、思いのままにならない様子を表す表現である。この典故を踏まえた用例は枚挙に暇ないが、中唐以降はその用法が拡張し、憂いのほかにも、生理的な痒みから頭を掻くものや、散人・狂人・道士といった超俗人の容貌やしぐさ、あるいは自由放逸な態度を表した用例が増加する。とりわけ白居易の用例は、身体の心地よさをリアルに映し出している点が特徴的である。

・日高公府帰、巾笏随手擲、脱衣恣搔首、坐臥任所適
(日高くして公府より帰り、巾笏手に随ひて擲つ、
衣を脱ぎて恣に首を掻き、坐臥適する所に任す)

[279 北亭]

・眼明見青山、耳醒聞碧流、脱襪閑濯足、解巾快搔頭
(眼明らかにして青山を見、耳醒めて碧流を聞く、
襪を脱ぎて閑に足を濯ひ、巾を解きて快く頭を掻く)

[3036 何処堪避暑]

・睡足一屈伸、搔首摩挲面(睡足りて一たび屈伸し、
首を掻きて面を摩挲す)

[2996 新秋喜涼因寄兵部楊侍郎]

これらの詩において、頭を掻く動作は、身に纏っていた堅苦しい官服から体が解き放たれたときの解放感([279 北亭])や、熱を帯びた体が涼を得たときの爽快感([3036

何処堪避暑)、ぐっすり心地よい眠りから覚めたあとの伸びやかさ([2996 新秋喜涼因寄兵部楊侍郎])など、生理的な感覚に基づく心地よさを、具体的に視覚的に表現して、印象づける効果を發揮している。

姚合にも、同様の例が見受けられる。

・客来無酒飲、搔首擲空瓢(客来たるも酒の飲む無く、
首を掻きて空瓢を擲つ)

姚合「春日閑居」(『姚少監詩集』卷六)

・日高搔首起、林下散衣行(日高くして首を掻きて起
き、林下に衣を散じて行く)

姚合「憶山」(『姚少監詩集』卷六)

「春日閑居」には、せっかく客が来たのに酒がないので、頭を掻きながら空っぽの瓢を放り投げるさまが描かれており、どこか世俗を超越した放逸さを漂わせる。⁽²⁰⁾

しかし「憶山」には、日が高くなってから頭を掻きながら起き、ラフな格好で林を歩く日常の一齣が、生き生きと映し出されている。昼までよく眠った充足感が生理的レベルで捉えられ、頭を掻く動作を通して鮮やかに示されているのである。これは、白居易[2996 新秋喜涼因寄兵部楊侍郎]に見られる寝起きの心地よさと、同質の充足感であろう。

姚合「憶山」の制作年は不明だが、白居易の「573 北亭」(元和十一年)が姚合に先んじるであろう。元和十一

年は、姚合及第の年であり、及第前の姚合の詩を白居易が見たと考えにくいからである。

(3) 「冷酒」

酒の描写にも、両詩人に共通の表現が見受けられる。白居易は、アルコールが体に入って内臓が熱くなる様子を描いたり、酒を温める行為を好んで詩に詠み込むなど、生理的レベルにおいても飲酒の充足感を捉えた句がある。そして、春になって温めずに飲む酒が全身に広がるひんやり感を、「冷酒」の語によって表した。

「冷酒」の語は、詩語としては中唐まで未見であり、『顔氏家訓』に「残杯冷炙之辱^②」とあるように、残り物の冷めた膳を想起させる。白居易も「583 送張山人歸嵩陽」では、この典故を踏まえて、「残茶冷酒愁殺人」（「残茶冷酒人を愁殺す」と詠い、冷遇を受けるさまを描いているが^③）のちにはこの表現を用いて、ひんやりと心地よい春の酒を描写した。

・春風北戸千茎竹、晚日東園一樹花、小盞吹醅嘗冷酒、
深炉敲火炙新茶（春風 北戸 千茎の竹、晚日 東園
一樹の花、小盞 醅を吹きて冷酒を嘗め、深炉 火を敲
きて新茶を炙る） [923 北亭招客]

・凍花開未得、冷酒酌難醒、就日移輕榻、遮風展小屏
（凍花 開くこと未だ得ず、冷酒 酌みて醒め難し、
日に就きて輕榻を移し、風を遮りて小屏を展ぶ）

[2718 何処春先到]
・画堂三月初三日、絮撲窓紗燕払簷、蓮子數杯嘗冷酒、
柘枝一曲試春衫（画堂 三月初三日、絮は窓紗を撲ち
燕は簷を払ふ、蓮子數杯 冷酒を嘗め、柘枝一曲 春
衫を試す） [3257 三月三日]

姚合にも、これと同様の表現が見られる。「遊春十二首」は武功県における作であり、「武功県中作」と並ぶ姚合の代表作である。

「遊春十二首」其八（『姚少監詩集』卷六）
処処春光遍 処処春光遍く
遊人亦不稀 遊人 亦た稀ならず
向陽傾冷酒 陽に向かひて 冷酒を傾け
看影試新衣 影を見て 新衣を試す
嫩樹行移長 嫩樹 行くゆく移りて長じ
幽禽語旋飛 幽禽 語りて 旋り飛ぶ
同來皆去尽 同に來たるも 皆な去り尽くし
衝夜独吟帰 夜を衝きて 独り吟じて帰る

辺りはどこも春めき、行樂を楽しむ人が増えてきた。姚合は、日向ぼっこをしながらひんやりとした酒を傾け、自分の影を見ながら新しい服を試着する。樹には柔らかな若葉が芽吹き、鳥たちが語りかけるように飛び回る。夜になって誰もいなくなったあと、ひとり詩を吟じなが

らゆつくりと帰る。

この詩は、一篇を通して、春を愛でるのびやかな雰囲気が漂っている。白居易の「冷酒」を詠じた詩にも、暖かい春の情景描写は見られたが、姚合は、一句の中に日向ぼつこのぬくもりと酒のひんやり感を凝縮して詠み込んでおり、春ならではの心地よさを、身体レベルで鮮明に捉えている。

中唐以降「冷酒」の語は、他の詩人にも見られるが、いずれも寒食や清明節に火が使えない背景のもとで詠み込まれている。一方、姚合と白居易の詩には、禁火との関連は見出せず、春の温もりやのびやかさが詩全体を覆う基調となっている。春の酒のひんやり感を心地よいものとして詠み込もうという意識が、両者に共通していることが窺えよう。

両者の制作時期については、白居易〔33〕北亭招客（元和十一年）が姚合の詩に先んじる。当時白居易の詩は、「琵琶引」の伝誦状況からも明らかのように、江州左遷期の作でも、すぐに都に伝わるほどの知名度を誇っていた。姚合が、白居易と面識を持つ以前の早い時期から、白居易の詩作に共感を寄せていたことは、「冷酒」の語の用い方からも推察できるのではないだろうか。

さらに興味深いことに、姚合のこの二句「向陽傾冷酒、看影試新衣」は、白居易の開成元年の作〔34〕閑居春尽に「掲甕偷嘗新熟酒、開箱試著旧生衣」（甕を掲げて偷かに新たに熟せし酒を嘗め、箱を開きて旧き生衣を試著す）

とあるのと、酷似している。白居易が春から夏にかけての飲酒と衣替えを、姚合が冬から春にかけてのそれを詠むのと、季節がやや異なるだけであり、両者とも、服の試着という日常のありふれた行為に、飲酒と同等の閑適の要素を見出しているのである。

白居易の句には「掲甕」「開箱」という細やかな動きが添えられ、「偷」かに「嘗」めるさまには、つまみ食いをする子供にも似た、欲望を抑え込まない気ままな老人の日常が映し出されている。〔35〕閑居春尽は、両者が親しい交流を始めた後の作であることから、白居易が姚合の句を目にして、自らの詩作に活用したとの推測も、あながち無理なことではないだろう。

（4）「詩魔」

閑適の世界を描いた表現ではないが、姚合と白居易の関係を見る上で、欠くことのできない重要な例を、もう一つ挙げておきたい。冒頭で述べたように、岡田充博氏が指摘されている「詩魔」の語である。

岡田氏が指摘されるとおり、中唐を代表する詩人達による「苦吟」と「詩魔」の語の截然とした使い分けにおいて、唯一の例外が姚合であり、姚合の詩には両方の用例が見受けられる。ここでは、中唐における「詩魔」の用例を年代順に整理し、この言葉に対する姚合の関心の高さを確認したい。

・元和五～九年 (810～814)⁽²⁵⁾

近來逢酒便高歌、醉舞詩狂漸欲魔（近來 酒に逢へば
便ち高く歌ひ、醉舞 詩狂にして 漸く魔ならんと
す）
元稹「放言五首」其一（卷四一二）

・元和十年 (815)

知我者以為詩仙、不知我者以為詩魔。何則、勞心、
役声氣、連朝接夕、不自知其苦、非魔而何。（我を知る
者は以て詩仙と為し、我を知らざる者は以て詩魔
と為す。何となれば則ち、心霊を勞し、声氣を役し、
朝を連ねて夕に接ぐも、自ら其の苦を知らざれば、
魔に非ずして何ぞや。）
白居易「1486 与元九書」

・元和十二年 (817)

自從苦學空門法、銷尽平生種種心、唯有詩魔降未得、
每逢風月一閑吟（苦に空門の法を學びてより、銷
し尽す 平生種種の心、唯だ詩魔有りて降すること未だ
得ず、風月に逢ふ毎に一たび閑吟す）
白居易「1004 閑吟」

・元和十三年 (818)

酒狂又引詩魔発、日午悲吟到日西（酒狂 又た詩魔を
引きて発し、日午 悲吟して日の西するに到る）
白居易「1065 醉吟二首」其二

・長慶元年 (821)

野客相逢添酒病、春山暫上着詩魔（野客 相ひ逢ひて
酒病を添へ、春山 暫く上りて詩魔に著かる）
姚合「罷武功県將入城二首」其二（『姚少監詩集』
卷五）

・宝曆元年 (825)

心知洛下閑才子、不作詩魔即酒顛（心に知る 洛下の
閑才子、詩魔と作らざれば即ち酒顛となるを）
劉禹錫「春日書懷寄東洛白二十二楊八二庶子」
（卷三六〇）

・大和九年 (835)

客有詩魔者、吟哦不知疲（客に詩魔なる者有り、吟
哦して疲るるを知らず）
白居易「2887 裴侍中晉公以集賢林亭即事詩三十
六韻見贈猥蒙徵和才拙詞繁輒広為五百言以伸酬
献」

まず、元稹が「放言」で、酒に酔って舞い詩を吟じる
放狂ぶりを「魔になりそうだ」（「欲魔」）と言い、白居
易が「1486 与元九書」において、朝夕問わない詩作への
熱狂ぶりを、他人から「詩魔」と見なされることを記し
ている。これ以降、白居易において「詩魔」の語は定着
し、「1004 閑吟」「1065 醉吟」では、他人の目を通してで

はなく、直接自分で自分を形容するのに用いている。このあと、姚合が「詩魔」の語を用いるのである。

「罷武功県將入城」は、姚合が武功県主簿の任を終えて、都に帰るときの作であり、野客に会えばついつい酒の量が増え、春の山に登れば「詩魔」に取り憑かれたように詩作に没頭してしまうと詠う。姚合には、当然苦吟のさまを詠じた句も多いが、美しい春の緑を前にのめりこむ詩吟に、「苦」の要素は無縁であるう。白居易と親交のあった劉禹錫でさえ、これより四年も後に、しかも白居易の姿を描くために「詩魔」の語を用いている。姚合は、白居易によつて生み出され定着したばかりのこの言葉を、自分自身の詩作への耽溺を描くのいち早く取り込んだのである。姚合が、白居易の詩語を鋭敏に捉えていたことが明らかである。

三 白居易と共通の詩境

(1) 睡眠嗜好とものぐさな態度

前述のとおり、寢床の柔らかさや温かさを描いた、白居易に独特の表現「枕低」は、山翁の気ままな睡眠を描いた姚合の詩に、まず先に見受けられた。また、憂いの様を表す「搔首」の語によつて、寝起きの心地よさを描く表現は、姚合が白居易の詩から取り込んだ可能性が指摘できた。姚合には他にも、睡眠を閑適の要素として描いた句が多く見られる。

「武功県中作」其六（『姚少監詩集』巻五）には、「縦

出多携枕、因衙始裏頭」（はしままに出でて多く枕を携へ、衙に因りて始めて頭を裏む）と、散策するのに枕を持ち運びするさまが詠じられており、「遊春十二首」其七（『姚少監詩集』巻六）には「恋花林下飲、愛草野中眠」（花を恋ひて林下に飲み、草を愛して野中に眠る）とあつて、野外で眠るようすを描いている。

また「遊陽河岸」（『姚少監詩集』巻八）には、「醉時眠石上、肢体自婆娑」（酔ひて時に石上に眠り、肢体自ら婆娑たり）と、酔っぱらつて河岸の石の上に寝てしまふ気ままな姿が描かれている。石の上に寝るといえば、曹丕「秋胡行」（魏詩巻一）に「枕石漱流、飲泉沈吟不決、遂上昇天、歌以言志」（石に枕し流れに漱ぎ、泉を飲み沈吟して決せず、遂に上りて天に昇り、歌ひて以て志を言ふ）とあるのを初めとして、「抱琴看鶴去、枕石待雲歸」（琴を抱きて鶴の去るを看み、石に枕して雲の歸るを待つ）（李端「題崔端公園林」、巻二八五）や「臥雲坐白石、山中十五宿」（雲に臥して白石に坐し、山中に十五宿す）（白居易「33 出山吟」など、仙人や隱者の姿を彷彿とさせる。しかし姚合は、石の上で体をのびのびと動かすさまを描いており、とりわけ生理的充足感に繋がるものとしてこの表現を用いている。

このほか、「何計長來此、閑眠過一生」（何ぞ計らん長く此に來たりて、閑眠して一生を過ぐすを）（「秋夜月中登天壇」、「姚少監詩集」巻八²⁸）のように一生寝て過ごそうというものの、「亦知官罷貧還甚、且喜閑來睡得多」（亦

た官罷くわむれば貧たること還かへた甚しきを知るも、且つ喜ぶ閑来 睡ること多きを得るを)〔「罷武功果將入城二首」其二、『姚少監詩集』卷五〕と、官を辞して存分に寝られることを喜ぶものもある。また、「臥暖身応健、含消齒免勞」(臥すこと暖かく身は応に健なるべく、含めば消えて勞するを免る)〔謝汾州田大夫寄茸氈葡萄〕、『姚少監詩集』卷九〕では、頂き物の茸氈による暖かい睡眠を詠んでいるが、暖かく穏やかな睡眠は、まさに白居易が好んで詩に詠じた世界である。睡眠の心地よさや気ままさを積極的に詠じようとする意識が、両者に共通していることが見て取れる。

このような睡眠嗜好に加え、役人としては実際に許されないようなものぐさぶりや、怠慢ぶりを詠じたものも目立つ。

例えば、「読書多旋忘、除酒數空還」(書を読み多く旋たちまち忘れ、酒を除おぞりて數しば還すを空しくす)〔武功果中作三十首〕其五、『姚少監詩集』卷五〕のように、書物を読んでも読む先から忘れてしまう様子や、「逢酒嫌杯淺、尋書怕字稠」(酒に逢ひて杯の淺きを嫌ひ、書を尋ねて字の稠おほきを怕る)〔客舍有懷〕、『姚少監詩集』卷六〕と、字がぎつしりの書物を毛嫌いする様子は、国を救うため読書に勤しむべき士大夫とは対極の、怠け者の姿である。白居易にも、眠気を催すために書物を開いたり、書物を枕に寝ようすを描いた句があるが、読書を素材としたものぐさぶりの詠出は、姚合の句に、より鮮

やかであろう。

また、「愛閑求病假、因醉棄官方」(閑を愛して病假を求め、酔に因りて官方を棄つ)〔武功果中作三十首〕其七、『姚少監詩集』卷五〕と、のんびりしたいが為に仮病を使つて仕事を休んだり、酔っぱらつて公務の書類を捨ててしまふ姿を詠んだものもある。

このように、睡眠嗜好やものぐさぶりの詠出は、姚合においても閑適世界を形成する重要な要素として定着しているのである。

(2) 趣味の世界への没頭

趣味の世界に没頭する姿も、社会の幸福を実現すべき士大夫のイメージとは、対照的である。プライベートの時間を求めようとする姿勢は、従来、職務の忙しさからの解放を望んだり、仕事の合間に余暇を楽しもうとする形で表出されていた。例えば、魏・劉楨「雜詩」〔『文選』卷二九〕には、仕事の書類が山積みになって、食事を取る時間もないようすが「職事相填委、文墨紛消散、馳翰未暇食、日昃不知晏」(職事 相ひ填委し、文墨 紛として消散す、翰を馳せて未だ食するに暇あらず、日昃かたむくも晏いふを知らず)と書かれ、多忙な職務から解放されて自由になりたい心境が、「方塘含白水、中有鳬与鴈、安得肅肅羽、從爾浮波瀾」(方塘は白水を含み、中に鳬と鴈と有り、安くんぞ肅肅たる羽を得て、爾なんぢに従ひて波瀾に浮かばん)と詠じられている。

公務の合間に余暇を楽しむようすは、宋・鮑照「擬青陵上柏」（宋詩卷九）に「書翰幸閑暇、我酌子繁絃」（書翰閑暇を幸へば、我は酌みて子は絃を繁らさん）、齊・謝朓「冬日晚郡事隙」（齊詩卷三）に「案牘時閑暇、偶坐觀卉木」（案牘時に閑暇にして、偶たま坐して卉木を觀る）、昭明太子「文選序」に「余監撫余閑、居多暇日、歴觀文囿、泛覽辭林、未嘗不心遊目想、移晷忘倦。」（余監撫の余閑に、暇日多きに居り、歴く文囿を觀、泛く辭林を覽るに、未だ嘗て心に遊び目に想ひ、晷を移して倦むを忘れずんばあらず。）といった句が見受けられ、時間を見つけて讀書や勉學に励んだり、自然や音楽、酒などを樂しむさまが描かれている。

趣味の世界そのものを堂々と追求し、積極的に楽しむとする姿勢を明確に打ち出したのが、白居易の閑適詩であった。そして、とりわけ洛陽退居後の白居易は、プライベートのんびりした時間を「閑」、官吏として忙しく煩わしいようすを「忙」として、度々兩者の閑係に言及し、閑適を志向する上での独自の思想を展開している。

例えば、「唯此錢唐郡、閑忙恰得中」（唯だ此の錢唐郡、閑忙 恰も中を得たり）〔1228 初到郡齋寄錢湖州李蘇州〕、「似出復似処、非忙亦非閑」（出づるに似て復た処るに似たり、忙に非ず 亦た閑に非ず）〔1227 中隱〕、「年來數出覓風光、亦不全閑亦不忙」（年來 數しば出でて風光を覓む、亦た全くは閑ならず 亦た忙ならず）〔1234 閑出覓春戲贈諸郎官〕のように、「忙」「閑」の中間の

状態を捉えて満足したり、「五十年来思慮熟、忙人忘未勝閑人」（五十年来 思慮熟す、忙人忘に未だ閑人に勝らざるべし）〔1238 閑行〕、「閑忙俱過日、忙校不如閑」（閑忙俱に日を過いせども、忙は校や閑に如かず）〔1245 閑忙〕のように、「忙」より「閑」の方がよいという率直な思いを、吐露するものもある。

さらに、「閑忙各有趣、彼此寧相見」（閑忙 各おの趣き有り、彼此 寧ぞ相ひ見んや）〔1296 新秋喜涼因寄兵部楊侍郎〕と、「忙」「閑」それぞれに同等の価値を認めたり、「身閑心無事、白日為我長、我若未忘世、雖閑心亦忙」（身は閑にして心は無事なり、白日 我が為に長し、我若し未だ世を忘れずんば、閑なりと雖も心は亦た忙なり）〔1298 詠興五首・池上有小舟〕、「俗客看來猶解愛、忙人到此亦須閑」（俗客 看に來たりて猶ほ解く愛す、忙人 此に到らば亦た 須く閑なるべし）〔1280 題岐王旧山池石壁〕のように、「忙」と「閑」は心の持ちようで決まるのだという見方には、白居易独特の発想の転換や晩年にかけての価値観の拡大も垣間見られる。

ただし、ここで筆者が問題にしたいのは、白居易のこれらの詩句においても、「忙」と「閑」が相対立する両極の状態として認識されている点である。これは、現代に至るまで、常識として通用する捉え方であろう。

ところが、趣味の世界への没頭を描いた白居易と姚合の詩には、この一般認識から大きく外れる表現が見受けられるのである。まず、白居易「2284 偶作二首」其二を

見てみよう。この詩は、一日を五等分し、「日出」(身支度を整えて道場で修行)・「日高」(食事)・「日午」(窓辺のベッドで休憩)・「日西」(散歩や喫茶、吟詩)・「日入」(晩酌や霓裳曲の鑑賞)と、それぞれの日課を記したあと、次のように続いている。

一日分五時	一日五時に分け
作息率有常	作息率 ^{おほむ} ね常有り
自喜老後健	自ら老後の健やかなるを喜び
不嫌閑中忙	閑中の忙しきを嫌はず
是非一以貫	是非一以て貫き
身世交相忘	身世 ^{こも} 交 ^{こも} も相ひ忘る
若問此何許	若し此は何 ^{いづこ} 許かと問はば
此は無何郷	此は無何の郷

ここに見られる「閑中忙」とは、趣味を日課とした閑適の生活において、スケジュールがぎつしりと刻まれているようすを表している。従来のパターンのように、仕事の合間にプライベートを楽しむのであれば「忙中閑」ということになるが、ここでは、プライベートの世界を「閑」と捉えた上で、その中に「忙」という状態を見出しているのである。この「忙」は、禅の修行や食事、音楽鑑賞、散歩、晩酌など、次から次へとやることがあって暇がない状態を言うものであり、趣味に勤しむ白居易の充実⁽³⁾ぶりが見て取れる。

「閑」であるはずの趣味の世界に対して、その没頭ぶりを「忙」と表した表現は、姚合にも見受けられる。「武功県中作」其二十一を見てみよう。

「武功県中作三十首」其二十一『姚少監詩集』卷五)	
假日多無事	假日は多く事無し
誰知我独忙	誰か知らん我独り忙なるを
移山入県宅	山を移して県宅に入れ
種竹上城牆	竹を種えて城牆に上らしむ
驚蝶遺花藥	驚蝶は花藥を遺し
遊蜂帶蜜香	遊蜂は蜜香を帶ぶ
唯愁明早出	唯だ愁ふ明早出でて
端坐吏人旁	吏人の旁 ^{かたはち} に端坐するを

休日の閑居を詠じたこの詩は、「休みの日は大抵することがないものだ、私ひとり忙しいことなど誰も知るまい」と始まる。何が忙しいのかというと、三四句に「武功県宅の庭に山を盛つて、塀の高さまで伸びるように竹を移植する」と描かれており、自宅の造園作業に精を出しているのである。蝶や蜂が飛び交うのどかな情景が、閑適の雰囲気⁽⁴⁾に彩りを添えた後、末句では明朝仕事に行きたくない⁽⁵⁾と、あまりに率直な心の中が詠われている。

次の「独居」にも、家に閉じこもって趣味に没頭するさまが描かれている。

「独居」(『姚少監詩集』卷六)

深閑柴門長不出
功夫自課少閑時
翻音免問他人字

深く柴門を閉ぢて 長く出でず
功夫 自ら課して 閑時 少なし
音を翻して 他人に字を問ふを免

覆局何勞對手棋

局を覆して 何ぞ 相手の棋を勞せ
んや

生計如雲無定所
窮愁似影巧相隨
到頭歸向青山是

生計は雲の如く 定むる所無く
窮愁は影に似て 巧みに相ひ隨ふ
到頭 歸りて 青山に向かふは 是なり

塵路茫茫欲告誰

塵路 茫茫として 誰にか告げんと
欲する

三句目の「翻音」は「反音」と同じで、反切を表す表現である。陸徳明撰『經典釈文』序の条例に「然音書之体、本在仮借。或經中過多、或尋文易了、則翻音正字以并借音。」(然れども音書の体は、本、仮借に在り。或いは經中に過多多く、或いは文を尋ねて了らかにし易きは、則ち正字を翻音して以て借音を并ず。)、顏師古撰『漢書』の叙例に「字或難識、兼有借音。義指所由、不可暫闕。若更求諸別卷、終廢於披覽。今則各於其下、隨即翻音。」(字、或いは識り難きは、兼て借音有り。義は由る所を指し、暫くも闕くべからず。更に諸を別卷に求むるが若きは、終に披覽を廢す。今則ち各おの其の下に於いて、隨即

に翻音す。)とあるが、詩語としての用例は未見である。これは、誰かに字の読み方を尋ねるのではなく、自力で反切を調べる様子を描いたものであろう。

四句目の「覆局」は、『三國志』王粲伝の、王粲が壞れた碁の局を元通りに並べ直したり、道端の石碑の字を一字違わず暗誦したことを記した箇所に見える語で、碁局の復元を表す。庾信「奉和永豐殿下言志詩十首」其五(北周詩卷四)の「覆局能懸記、看碑解暗疏」(局を覆して能く懸記し、碑を看て解く暗疏す)は、この典故を踏まえて、記憶力の良さを表現しているが、姚合のこの詩は「相手を煩わせる必要はない」と続いているので、自分で碁石を並べ直して、打つ手を研究するさまを表しているのであろう。三四句の「(翻音) 免問他人字」「(覆局) 何勞對手棋」は「独居」の「独」の状態を、ありありと具象化した表現である。

漢字の反切を調べることは、学問の一環とも言えようが、碁の打ち方の研究は趣味の領域に属し、「閑」を得てこそ可能なことである。姚合はしかし、碁を楽しむ条件として「閑」を詠じるのではなく、碁を日課にしているために「閑」を得られないと詠うのである。

この詩は、後半で生計を立てられないことを憂い、青山に帰隱するのがよいと言うことから、吏とも隠とも定まらない境遇に苦悩する心境が推察される。官僚生活の休日の一齣を詠じた「武功県中作」と、その背景は異なるが、家に閉じ籠もるさまを描いた一句目「深閑柴門長

不出」は、明らかに隠遁や閑居の描写である。従来ならば「閑」と捉えられるべき環境において、仕事とは対照的な趣味への熱中ぶりが、「少閑時」と表されているのだが、この「少閑時」は即ち「武功県中作」に見られた「忙」である。白居易が「284 偶作二首」其二において「閑中忙」と詠じたのと、全く同じ発想である。

ただし、姚合と白居易には、「閑」の世界そのものの捉え方において、若干の相違も認められる。白居易の詩は「是非一以貫、身世交相忘、若問此何許、此是無何郷」と結ばれており、心身を忘れ世俗の煩わしさを超えた無何の境地として、趣味の生活を描いている。つまり、官吏としての現実とは、完全に忘却されているのである。一方、姚合の詩の末句には、公的世界への嫌悪感や帰隱願望が表明されており、「吏」から一時的に離れた「假」や「閑」の空間において展開される造園作業や碁の練習が、「忙」と捉えられていることが分かる。「吏」の世界は忘却されたのではなく、戻りたくない現実としてはつきりと意識されているのである。

ことに「武功県中作三十首」其二十一の末句「唯愁明早出、端坐吏人旁」には、「吏」の世界への嫌悪感が、あまりに直截に吐露されていた。これは例えば、韋応物「慈恩精舍南池作」（卷一九二）が、清らかな雰囲気の寺に遊んだ後、末句を「明晨復趨府、幽賞当反思」（明晨復た府に趨くに、幽賞当に反思すべし）と結び、明朝職場に赴いても、今の精神的充足を思い返すことになるだろうと詠う

のとは対照的である。韋応物は、自己の内面において「隠」の持続を望むものの、「吏」への参与は否定しない。白居易も「閑」「忙」を詠じた詩においては、「吏」に対する一定の価値を認めていることが窺えた。韋応物から白居易、姚合へと連なる吏隱思想に質的な違いがあるのかどうかは攷くとして、姚合においては「吏」に対する嫌悪感が、趣味への傾倒の度合いをより一層深めている。

白居易に見られる「閑中忙」の語は、言葉遣いの面で鮮烈な印象を与えるが、「吏」と完全に対立させた「閑」の世界に対して、趣味への没頭ぶりを「忙」と表した姚合の詠じ方には、「閑」と「忙」の一般的な認識との相違が、より鮮やかに認められるであろう。

四 白居易と共通の表現上の工夫

―詩語のイメージの転換―

前節で取り上げた「独居」には、「翻音」という、詩語としては前例のない言葉が使われていた。また、「覆局」の語が、記憶力の良さという典故どおりの意味ではなく、自分で碁石を並べて打つ手を研究する意で用いられていた。

そして、「武功県中作三十首」其二十一では、休日の造園作業が「移山入県宅、種竹上城牆」と描かれていたが、「移山」と言えば、家の前に立ちはだかつて通行の妨げとなっていた山を自力で除けようとした、「愚公移山」の故事が思い起こされる。唐詩にも「擱土移山望山尽、投

石填海望海満³⁶（土を掬ひ山を移して山の尽くるを望み、石を投げ海に填めて海に満つるを望む）〔韋応物「難言」卷一六五〕、「浮生不住葉隨風、填海移山總是空」（浮生は住まらず葉は風に随ふ、填海移山総て是れ空なり）〔王建「題禪師房」卷三〇一〕、「東堂旧屈移山志、南国新留煮海功」（東堂旧に屈す移山の志、南国新たに留む煮海の功）〔許渾「送嶺南盧判官罷職帰華陰山居」卷五三三〕といった句が見られ、「移山」の語が、堅固な意志や不屈の精神を表す典故表現として定着していることが分かる。

しかし姚合は、「移山」の語から意志の固さという象徴的な意味合いを削ぎ落とし、障害物を排除するため遠方に土を移すようではなく、自宅の庭の景観をよくするために土を運んできて山を造るようすを描写した³⁷。「移山」の語は、愚公の故事に直接リンクするため、せつせと土を運ぶ様子が生き生きと映し出されるとともに、姚合がそういった自己の姿に、「愚」の要素を認めていたさまも想像できるだろう。私的空間の充実を図って、気に入った物を取り込むとする意識が、典故に束縛されない詩語の取り込み方にも反映されている。

このように、言葉が持つ従来のイメージをうまく転換し、独自の閑適の世界を自由に詠い上げる姚合の独創は、「乞酒」の詩にも見受けられる。

「乞酒」〔姚少監詩集〕卷八

聞君有美酒 君に美酒有るを聞く
与我正相宜 我と正に相ひ宜し
溢甕清如水 甕に溢れて清なること水の如く
粘杯半似脂 杯に粘して半ば脂に似たり
豈唯消旧病 豈に唯だ旧病を消すのみならんや
且要引新詩 且つ要ず新詩を引かん
況此便便腹 況んや此の便便たる腹
無非是満厄 是れ満厄に非ざること無きをや

この詩は、まず「君のところとうまい酒があるらしいね、まさに私にぴったりの酒だ」と言い、酒の旨さを清らかさと濃さの両面から描いたあと、持病の治癒と詩作の促進という、魅力的な効能を指摘する。そして「ましてや私のこの大きな腹は、なみなみと満たされる厄のごとく、酒がいっぱい入りますよ」と結び、大量に送るよう求めるのである。

「武功県中作三十首」其十八には、「野客嫌杯小」の句があり、小さな杯を嫌う隠者の姿が描かれていたが、ここでは、姚合自身の自由気ままな欲望が詠出されている。腹いっぱい満たせるように大量に求めるところにも、放逸さや食欲さが表れているが、この「便便腹」という表現が『後漢書』に典故を持つことに注目したい。『後漢書』文苑列伝・辺韶伝は、次のような話を載せている。

辺韶字孝先、陳留浚儀人也。以文章知名、教授数百

人。韶口弁。曾昼日佯臥、弟子私嘲之曰、「辺孝先、腹便便。嬾読書、但欲眠。」韶潛聞之、応時対曰、「辺為姓、孝為字。腹便便、五経笥。但欲眠、思経事。寐与周公通夢、静与孔子同意。師而可嘲、出何典記。」嘲者大慙。韶之才捷皆此類也。（辺韶字は孝先、陳留浚儀の人なり。文章を以て名を知られ、教授すること数百人なり。韶は口弁あり。曾て昼日に佯臥するに、弟子私に之を嘲りて曰く、「辺孝先、腹便便たり。読書を嬾り、但だ眠らんと欲す」と。韶潛に之を聞き、時に応じて對へて曰く、「辺を姓と為し、孝を字と為す。腹の便便たるは、五経の笥なり。但だ眠らんと欲し、経事を思ふ。寐ねて周公と夢を通はせ、静かにして孔子と意を同じくす。師にして嘲るべきこと、何の典記に出づるか」と。嘲りし者大いに慙はす。韶の才捷なること皆な此の類なり。）

辺韶が昼寝をしていたところ、弟子が「辺韶先生は大きな腹をして、読書を怠つて寝てばかりだ」とからかった。これを聞いた辺韶は、とつさに「この膨らんだ腹は、五経が詰まった箱なのだ」「私が寝るのは、孔子のように夢で周公に遭うためだが、君が私を嘲笑するのは、何を典故としているのか」と返し、弟子を言い負かしたという。辺韶の機転の良さと弁舌ぶりをよく伝えるエピソードである。

唐詩には、この典故を踏まえた表現が、数多く見られる。

・経書満腹中、吾識広川翁（経書 腹中に満ち、吾広川の翁を識る） 盧象「贈広川馬先生」（卷一二二）
・腹中貯書一万卷、不肯低頭在草莽（腹中に書一万卷を貯へ、頭を低れて草莽に在るを肯んぜず）

李頎「送陳章甫」（卷一三三）

・風流一才子、經史仍滿腹（風流たる一才子、經史仍ほ腹に満つ）

劉長卿「贈別于群投筆赴安西」（卷一五〇）

・滿腹万余卷、息機三十年（腹に満つる万余卷、機を息むこと三十年）

劉長卿「夜宴洛陽程九主簿宅送楊三山人往天台

尋智者禪師隱居」（卷一五〇）

・兵法五十家、爾腹為篋笥（兵法五十家、爾は腹は篋笥たり） 杜甫「送從弟亞赴安西判官」（卷二二七）

・語及君臣際、經書滿腹中（語は君臣の際に及び、經書 腹中に満つ） 杜甫「吾宗」（卷二三〇）

・腹中書籍幽時囈、肘後医方静处看（腹中の書籍は幽時に囈し、肘後の医方は静处にて看る）

嚴武「寄題杜拾遺錦江野亭」（卷二六一）

・人之能為人、由腹有詩書、詩書勤乃有、不勤腹空虚（人の能く人たるは、腹に詩書有るに由る、詩書は勤しめば乃ち有り、勤しまざれば 腹空虚なり）

韓愈「符読書城南」(卷三四一)

- ・腹中書万卷、身外酒千杯(腹中に書万卷、身外に酒千杯) 杜牧「送張判官歸兼謁鄂州大夫」(卷五二四)
- ・腹是群書筍、官為六義師(腹は是れ群書の筍なり、官は六義の師たり)

劉得仁「贈雍陶博士」(卷五四四)

- ・戲悲槐市便便筍、狂憶樟亭滿滿杯(戯れに槐市の便便たる筍を悲しみ、狂りに樟亭の滿滿たる杯を憶ふ)
- 羅隱「暇日感懷因寄同院吳蛻拾遺」(卷六六〇)
- ・便便書腹德無隣、健筆從知又入閨(便便たる書腹德に隣無く、健筆 従りて知り 又た閨に入る)

貫休「送鄭閣赴閩辟」(卷八三五)

これらは全て、辺韶の故事を踏まえ、腹に書物が詰まっているようすを描くことによつて、弁舌ぶりや機転の速さ、文才、博識などを表したものである。ところが姚合は、「腹便便、五経筍」を「況此便便腹、(無非)是満厄」と言い換え、經典ではなく酒が入る腹だと言い、文才ではなく酒豪ぶりを表した。辺韶先生の、ものぐさで奔放な性格や大きく膨らんだ腹のイメージを巧みに活用しつつ、弁舌や博識という高尚なイメージを転換して、貪欲に厚かましく酒を求める自身の姿を、生き生きと描き出したのである。

典故のイメージをうまく転換しながら、閑適の世界を効果的に詠出する用法は、白居易の特徴として繰り返し

述べてきたものだが、姚合独自の表現においても同様の工夫が見受けられるのである。

おわりに

姚合は、従来、苦吟派詩人としての側面が取り上げられることが多かったが、閑適の詩も数多く残している。そこには、「枕低」「搔首」「冷酒」「詩魔」といった白居易に独特の語彙や表現が見られたほか、睡眠嗜好やものぐさな態度、趣味の世界に没頭する姿も詠われており、白居易との共通点が認められた。

共通の語彙に関しては、「低枕」のみ姚合が白居易に先んじる以外は、主に姚合が白居易の語を取り入れる形で共有されており、姚合が白居易の閑適詩に対して、早い時期から大きな関心を寄せていたことが見て取れた。そして、酔った勢いで仕事の書類を捨ててしまう様子や、のんびりしたくてずる休みする様子、仕事に行きたくないという単刀直入な嫌悪感の吐露や、大きな腹にたっぷり入る量の酒を送るように乞う姿など、欲望を表出する直截さや俗っぽさにおいては、白居易を凌ぐのではないかと思われる部分さえ見受けられた。閑適の世界を詠出しようとする姚合の創作意識は、決して白居易に引けをとるものではなかったのである。

姚合は、宝暦年間には監察御史、大和年間には殿中侍御史・戸部員外郎、開成年間には諫議大夫、給侍中となつており、最終官位は秘書監であつた。白居易ほどのエ

リートではないが、科挙に合格できなかった賈島や、地方の下級官僚のまま終わった孟郊とは異なり、かなりの高位まで昇進した官僚だと言える。よつて、姚合の詩に映し出された士大夫らしからぬ姿を、そのまま事実として捉えることはできず、またその必要もないであろう。

一定の虚構が施されたとしても、それは、詩人にとつて真に表現したいことを表現するための有効な手段であつた。生理的な欲求を肯定し、欲望を抑え込まずに自由に詠い上げる。心地よいと感じた己の感覚に忠実に、素直にそれを表現する。そういった詩の世界もあつてよいのではないか——姚合は白居易と同じように、その思いを閑適の詩によつて示した。中唐における詩作精神の大きな躍進と言えるべきものである。

そして、姚合には、閑適の世界を効果的に描くため、典故のイメージを転換して用いたり、これまで焦点が当てられることのなかった部分に着目し、最大限に引き出して用いるという創意工夫も見受けられた。碁盤の復元から記憶力の良さを表す「覆局」の語によつて、一人で碁を研究するさまを描いたり、博識さを表す「便便腹」の語から腹の大きさを、固い意志を表す「移山」の語から土を運ぶ懸命さを全面に引き出し、酒を乞う食欲さや趣味の世界への没頭を詠出した例がそれである。言葉を、典故のイメージや従来の用法の束縛から解放した点にも、白居易との共通点が認められるのである。

また、これを白居易の側から見るならば、白居易が新

たに開拓した閑適の詩境とその表現は、時を同じくして価値が認められていたのであり、内容と表現の双方において、姚合という一定の受け皿を持っていたのだと言える。従来、白居易の閑適の要素が、同時代の横の繋がりにおいて捉えられることはあまりなかったようだが、白居易と姚合の関係から、中唐詩壇の新たな一面が、提示できるのではないだろうか。

勿論、本論は、白居易閑適詩との関連を軸として、姚合の詩を考察した結果であり、姚合における一つの側面を捉えたに過ぎない。今後は、苦吟派詩人としての側面についても考察を加え、その全貌に迫りたい。

注

- (1) 例えば、聞一多著「唐詩雜論」(『聞一多全集』卷三、朱自成・郭沫若編、上海開明書店、一九六七)には、「賈島姚合領着一群青年人做詩、為各人自己的出路、也為着癖好、做一種陰黯情調的五言律詩(陰黯由於癖好、五律為着出路)。」とあり、小川環樹著『唐詩概説』(岩波書店、一九八二)は、これを引用して、「賈島や姚合(775～853)は青年たちと暗い調子の五言律を作っていた。その暗い調子は性癖にもとづくもので、五言律を作ったのは、世に出る手段としてだった。」と書かれている。近藤春雄著『中国学芸大事典』(大修館書店、一九七八)には、「詩に長じ、詩風は賈島に類して刻意苦吟、五言をよくした。」とある。

- (2) 『集刊東洋学』第六八号、一九九二。

(3)『横浜国大語研究』第一一号、一九九三。

(4)南宋・劉克莊の「題程垣詩卷」(津逮秘書本『後邨題跋』卷三)にも、「余得君詩七卷、読之、竊知君喜姚合所編極元集、而自方賈島。余謂、姚賈縛律、俱窘辺幅。君所作稍抑揚開闔、窮變態、現光怪、絶不似姚賈。」(余君の詩七卷を得、之を読み、竊かに君姚合の編む所の極元集を喜みて、自ら賈島に方ぶるを知る。余謂へらく、姚賈は律に縛せられ、俱に辺幅に窘しむ。君作る所は稍や抑揚開闔し、変態を窮め、光怪を現して、絶て姚賈に似ず。)とあつて「姚賈」の語が見え、姚合賈島ともに律詩の体裁に拘りすぎであることが述べられている(*津逮秘書本は、避諱により「極玄集」の「玄」を「元」に作る)。また、南宋・晁公武撰『郡齋讀書志』には、趙師秀が賈島と姚合の選集『二妙集』を編んだことが記載されており(『二妙集』は刊行されず、現在、中国国家図書館に明代の抄本が所蔵されているのみである)、姚賈に対する評価と関心の高さが窺える。

(5)姚合を苦吟詩人とする根源について、玉城要「姚合の詩について——中唐期における新しい個性として——」(『中国文化——研究と教育——』(漢文学会会報五五号、一九九七)は「滄浪詩話」に認め、「ここに、姚合と賈島を『苦吟』という点から括る見方が現れ、以後、苦吟型の詩人として姚合と賈島は一まとめにして評されていく。」と述べられる。一方、王奎光「有小結裏、無大涵容——方回的姚合批評論析」(『蘭州學刊』二〇〇六年第十一期)は、元・方回の『瀛奎律髓』に認め、「方回所界定的詩学淵源、是源於姚合詩歌苦吟鍾煉的特

点。」と指摘する。

(6)姚合「遊春」の方回評(『瀛奎律髓』卷一〇)には、「詩亦一時新體也。而格卑於島、細巧則或過之。」(詩は亦た一時の新體なり。而して格は島より卑しきも、細巧は則ち或いは之に過ぐ。)、子謂詩家有六判斷、有小結裏。姚之詩專在小結裏、故四盡學之。五言八句、皆得其趣、七言律及古體則衰落不振。」(子謂へらく、詩家に六判斷有り、小結裏有り。姚の詩は専ら小結裏に在り、故に四盡之を學ぶ。五言八句、皆其の趣きを得、七言律及び古體は則ち衰落して振はず。)とある。同じく、「閑居晚夏」の評(『瀛奎律髓』卷一一)には、「姚合學賈島為詩。雖賈之終窮、不及姚之終達、然姚之詩小巧而近乎弱、不能如賈之瘦頸高古也。」(姚合賈島を學びて詩を為る。賈の終窮、姚の終達に及ばずと雖も、然れども姚の詩は小巧にして弱に近く、賈の瘦頸高古なるに如く能はざるなり。)、送李侍御過夏州の評(『瀛奎律髓』卷二四)には、「大抵姚少監詩不及浪仙、有氣格卑弱者。」(大抵姚少監の詩は浪仙に及ばず、氣格の卑弱なる者有り。)とある。

(7)「元和以還、律體多變。賈島姚合、思致清苦。」(元和以還、律體多く變ず。賈島・姚合、思致清苦なり。)とある。

(8)『極玄集』は姚合による撰集で、王維から戴叔倫に至る二十一人の詩が収録されている。

(9)「而其詞意、愈益平澹曠達、有古人所不易到、後來不可及者。」(而るに其の詞意、愈益ます平澹曠達にして、古人の到り易からざる所にして、後來及ぶべからざる者有り。)(宋・樓鑰「跋白樂天集目錄」、「攻媿集」所収、「周元公云、白香山詩似平易。」(周

元公云ふ、白香山詩は平易に似たりと。」(清・袁牧『隨園詩話』、「元白尚坦易、務言人所共欲言。」(元白尚ほ坦易にして、務めて人の共に言はんと欲する所を言ふ。)(清・趙翼『甌北詩話』、「近人好看白詩、乃学其率易之至者。)(近人白詩を見るを好み、乃ち其の率易の至なる者を学ぶ。)(清・潘德輿『養一齋詩話』など。なお、白居易の閑適詩における「平淡」の要素については、和田英信「白居易と「平淡」」(『白居易研究講座』第二卷、勉誠社、一九九三)に詳しい。

- (10) 『広西大学学報』哲学社会科学版、二〇〇四年第一期。
(11) 『揚州大学学報』人文社科版、二〇〇〇年第三期。
(12) 前掲注5。
(13) 「吏隱」の觀念が形成される歴史的背景については、赤井益久著『中唐詩壇の研究』(創文社、二〇〇四)に詳しい。
(14) 『文学評論』、一九九九年第一期。

- (15) 拙稿「白詩における生理的感覚に基づく充足感の詠出——「伸びをする」「頭を搔く」表現を中心に——」(『白居易研究年報』第五号、勉誠出版、二〇〇四)、「白居易の「枕」——生理的感覚に基づく充足感の詠出——」(『日本中国学会報』第五十七集、二〇〇五)、「白居易の酒の描写に見られる充足感の詠出」(『白居易研究年報』第九号、勉誠出版、二〇〇八)。

- (16) 蔣寅氏も、「值得注意的是、詩中提到的『野客』是『武功作』裏經常出現的重要角色。……這些『野客』不僅是吏隱生活的共享者或助成者、而且在趣味上直接構成对吏的否定。有了他的参与、加上周围詩人的作品的映襯、姚合的吏隱生活就更具体而鮮明了。」と述べられている(『「武功体」与『吏隱』

主題的發展」前掲注11)。

- (17) 姚合の事跡や詩の編年は、主に以下の論考を参照した。
・鄭健行「姚合考」(『中国詩歌論稿』、新亜研究所、一九八四)

- ・郭文鏞「姚合仕履考略」(『浙江学刊』、一九八八年第三期)
・徐希平「關於姚合生平若干問題的考索——向鄭健行先生求教」(『西南民族学院学报』哲学社会科学版、一九九四年第六期)
・謝栄福「読姚合詩雜考三則」(『徐州師範大学学報』哲学社会科学版、一九八七年第二期)
・張震英「20世紀姚合研究述論」(前掲注10)

また、白居易の詩の編年は、朱金城箋校『白居易集箋校』(上海古籍出版社、一九八八)に拠った。

- (18) 姚合「和李十二舍人裴四二舍人兩閣老酬白少伝見寄」(『姚少監詩集』卷九)、「和裴令公遊南莊憶白二十韋七二賓客」(『姚少監詩集』卷九)。これらの詩では、白居易の詩作の様子が、それぞれ「酒挈数瓶杯亦闊、詩成千首語皆新」(酒は数瓶を挈げて杯亦た闊に、詩は千首成りて語皆な新なり)、「半醉思韋白、題詩染彩翰」(半ば酔ひて韋白を思ふ、詩を題し彩翰を染むるを)と詠じられている。

- (19) 「2022 杭州迴舫」に「自別錢塘山水後、不多飲酒懶吟詩、欲將此意憑迴櫓、与報西湖風月知」(錢塘の山水に別れてより後、多くは酒を飲まず詩を吟ずるに懶し、此の意を將て迴櫓に憑まんと欲す、与に西湖の風月に報じて知らしめよ)とある。

- (20) これは、「有叟有叟何清狂、行攜短髮提壺漿」(叟有り叟

有り何ぞ清狂たる、行くゆく短髪を掻きて壺漿を提ぐ」〔李咸用「公無渡河」卷六四四〕の短髪を掻きながら酒壺を提げる狂曳や、「露衣尽日看山坐、搔首残春向路迷」〔衣を露らして尽日山を見て坐し、首を掻きて残春路に向かひて迷ふ〕〔趙嘏「王先生不別而去」卷五四九〕の、帰途に迷つて頭を掻く仙翁の姿とも重なる。

(21)『顔氏家訓』卷七・雜芸篇に、「見役勲貴、処之下坐、以取殘杯冷炙之辱。」〔勲貴に役せられ、之を下坐到処き、以て殘杯冷炙の辱を取る。〕とある。

(22)直接には、杜甫「奉贈韋左丞丈二十二韻」〔卷二一六〕の「朝扣富兒門、暮隨肥馬塵、殘杯與冷炙、到處潛悲辛」〔朝に富兒の門を扣き、暮に肥馬の塵に隨ふ、殘杯と冷炙と、到處悲辛潛む〕を踏まえた表現であらう。

(23)「世間尽是悠悠事、且飲韋家冷酒眠」〔世間 尽是悠悠悠たる事、且く韋家に冷酒を飲みて眠る〕〔殷堯藩「寒食城南即事因訪藍田韋明府」卷四九二〕、「餽餐冷酒明年在、未定萍蓬何處邊」〔餽餐冷酒 明年在り、未だ定まらざる萍蓬何處の邊〕〔李群玉「湖寺清明夜遺懷」卷五六九〕、「冷酒一杯相勸頻、異鄉相遇轉相親」〔冷酒一杯相ひ勸むること頻りなり、異郷相ひ遇ひて 轉た相ひ親しむ〕〔來鵠「鄂渚清明日與鄉友登頭陀山」卷六四二〕などである。

(24)當時の詩の傳播状況については、中純子「詩は人口に在り―地方における白詩の傳播」〔興膳教授退官記念『中国學論集』二〇〇三〕に詳しい。

(25)元稹の詩の制作年は、楊軍箋注『元稹集編年箋注』〔三秦

出版社、二〇〇二〕に拠った。

(26)「帶病吟雖苦、休官夢已清」〔病を帯びて吟ずること苦しと雖も、官を休めて夢已に清らかなり〕〔「閑居」、『姚少監詩集』卷五〕、「坐危石是榻、吟冷唾成氷」〔坐すること危くして石は是れ榻、吟ずること冷ややかにして唾氷と成る〕〔「陝下厲玄侍御宅五題・吟詩島」、『姚少監詩集』卷七〕、「眠遲消漏水、吟苦墮寒涎」〔眠ること遅くして漏水消え、吟ずること苦しくして寒涎墮つ〕〔「厲玄侍御無可上人會宿見寄」、『姚少監詩集』卷九〕など。

(27)岡田充博氏は、この時期の兩者の交流について、元和八年から十一年にかけて、姚合が李紳に和した詩があることを指摘され、「李紳を通じて白居易と知り合う機会もあったのではないだろうか。また直接の交遊がなかったとしても、當時すでに著名であつた白居易らの文學活動については、李紳から少なからぬ情報が伝わっていたと考えられる。」「グループの一員とまでは断言できないにしても、姚合が元和年間すでに、白居易グループに近い、少なくとも間接的にはつながりを持ちうる位置にいた、ということと言えるであらう。」と述べておられる〔「詩魔」補考、前掲注3〕。

(28)この詩は、劉衍『姚合詩集校考』には収められていないが、汲古閣刻唐人六集本・四部叢刊本・四庫全書本の卷八によつて補つた。

(29)「枕低茵席軟、臥穩身入牀」〔枕は低く茵席は軟らかなり、臥すこと穏やかにして身は牀に入る〕〔2867「新秋曉興」〕、「宴安往飲侵夜、臥穩昏昏睡到明」〔宴安らかにして往往にし

て歎夜を侵し、臥すこと穏やかにして昏昏として睡りて明に到る)〔3893 新制綾襖成感而有詠〕、「暖臥摩綿褥、寒傾葉酒螺」(暖かに臥す 摩綿の褥、寒くして傾く 葉酒の螺)〔3326 酬夢得見喜疾瘳〕、「飢烹一斤肉、暖臥兩重衾」(飢えて烹る 一斤の肉、暖かに臥す 兩重の衾)〔3663 閑居貧活計〕など。

(30)「趁涼行繞竹、引睡臥看書」(涼を趁ひて行くゆく竹を繞り、睡を引き臥して書を見る)〔1284 晚庭逐涼〕、「書卷略尋聊取睡、酒杯淺把粗開顔」(書卷は略ぼ尋ねて聊か睡を取り、酒杯は浅く把りて粗ば顔を開く)〔3648 閑居〕、「尽日後斤無一事、白頭老監枕書眠」(尽日 後斤 一事無し、白頭の老監 書を枕にして眠る)〔5529 祕省後斤〕、「臥枕一卷書、起嘗一杯酒」(臥して一卷の書を枕にし、起きて一杯の酒を嘗む)〔3022 隱几贈客〕など。

(31)白居易には他にも、道教の經典の朗読や琴の練習を、朝の日課としていることを詠んだ〔2293 朝課〕や、庭の手入れに励むことを主題とした〔3116 宮閑事〕の詩がある。造園や音楽、碁、道教といったプライベートな事柄に対して、「忙」「課」「宮」といった語を用いるのは、仕事の合間に楽しむのではなく、それ自体に勤しむ姿を描こうとしたからである。

(32)王彦坤『歷代避諱字匯典』(中州古籍出版社、一九九七)に「唐世諱言反」とあり、「反」が諱字であったことが分かる。なお、「反音」の語は、例えば『文心雕龍』指瑕篇に、「近代辭人、率多猜忌。至乃比語求蜚、反音取瑕、雖不屑於古、

而有挾於今焉。」(近代の辭人は、率ね猜忌多し。乃ち語を比べて蜚を求め、音を反して瑕を取るに至つては、古を屑ずと雖も、今に挾ばるる有り。)とある。

(33)『三国志』魏志・王粲伝に、「初、粲與人共行、誦道辺碑。

人問曰「卿能誦乎。」曰、「能。」因使背而誦之、不失一字。觀人圍棋、局壞、粲為覆之、棋者不信。以帊蓋局、使更以他局為之。用相比較、不誤一道。其彊記默識如此。」(初め、粲人と共に行きて、道辺の碑を読む。人問ひて曰く「卿能く誦誦するか」と。曰く、「能くす」と。因りて背んじて之を誦せしむるに、一字も失はず。人の棋を圍むを観るに、局壞れ、粲為に之を覆すも、棋する者信ぜず。帊を以て局を蓋ひ、更に他局を以て之を為さしむ。用て相ひ比較するに、一道も誤らず。其の彊記默識なること此の如し。)とある。

(34)權德輿『送信安劉少府』(卷三二四)にも、「吏散時泛弦、賓來閑覆局」(吏散じて時に弦を泛し、賓來たりて閑に局を覆す)の句がある。また、馬戴『寄金州姚使君員外』(卷五五六)では、姚合が碁や琴に長時間取り組むさまを、「覆局松移影、聴琴月墮光」(局を覆して 松影を移し、琴を聴きて 月光を墮とす)と描いている。

(35)『列子』湯問篇。

(36)韋忠物と王建の詩では、「愚公移山」と対に「投石填海」の典故表現が用いられている。これは、東海で溺死した少女が、精衛という鳥になって木石を運んで海を埋めようとした伝説(『山海經』北山經)に基づき、困難なことを成し遂げようと不屈の精神を表したものである。

(37) 王建「薛二十池亭」(卷三〇〇)にも、「斜豎小橋看島勢、遠移山石作泉声」(斜めに小橋を豎てて島勢を看、遠く山石を移して泉声を作る)とあって、「遠移山石」の語で庭造りが描写されているが、「移山」の語をそのまま詠み込んだ姚合の例に比べて、「愚公移山」のイメージは強くない。

(38) 「似」は、劉衍『姚合詩集校考』では「是」に作るが、汲古閣刻唐人六集本・四部叢刊本・四庫全書本に拠って、「似」に改めた。

(39) 腹中の書物を日干しする表現は、『世説新語』排調篇にも、「郝隆七月七日出日中仰臥。人間其故、答曰、『我曬書。』」(郝隆七月七日 日中に出でて仰臥す。人 其の故を問ふに、答へて曰く、『我書を曬す』と。)とある。

(40) 玉城要「姚合の詩について―中唐期における新しい個性として―」(『中国文化―研究と教育―』漢文学会会報五五、一九九七)は、姚合の詩に見られる「厨煙絶」「卑官」といった語について、本来マイナスイメージを喚起させる表現だが、自由な時間あるいは精神の自由といったプラス面をもたらずものとして、詠み込まれている点を指摘されている。

(41) 姚合の詩集が『姚少監集』として伝わることから、姚合の最終官位を秘書少監と見る説もあるが、例えば、郭文鏞「姚合仕履考略」(『浙江学刊』、一九八八年第三期)は、主に以下の点から秘書監であったとしている。①「李公夫人吳興姚氏墓誌」において姚合の子姚潜が父のことを「秘書監贈礼部尚書我府君之女弟也」と記していること。②姚合の詩集は『姚少監集』として伝わるが、『新唐書』藝文志・『崇文總目』・

『郡齋讀書志』では『姚合集』となっており、『姚少監集』と記しているのは『直齋書錄解題』のみであること。③『唐会要』巻七九の諡法によると、姚合が死後に正三品の礼部尚書を贈られていることから、生前の官位は従三品以上でなければならず、従四品の秘書少監であった可能性はないこと。

④徐希平『姚合雜考』が、姚合の最終官位を秘書少監とする根拠として、方干「哭秘書姚少監」(全唐詩卷六五〇)を挙げているが、この詩は『文苑英華』巻三〇四では「哭秘書姚監」に作ること。ただし、①の「李公夫人吳興姚氏墓誌」について、郭氏は羅振玉「李公夫人吳興姚氏墓誌跋」(『貞松老人遺稿』所収「丁戌稿」)を根拠としているが、この墓誌は、氣賀沢保規編『唐代墓誌所在総合目録』(明治大学東洋史資料叢刊1、汲古書院、一九九七)に載せられておらず、墓誌自体は未確認である。なお、『丁戌稿』は、『貞松老人遺稿』ではなく『羅雪堂先生全集』続編に収録されている。